

## 最近における殷式遺蹟の研究と発掘（上）

伊藤 道 治

甲骨文の出土で有名な殷墟は、河南安陽の小屯村を中心とする殷王朝の遺址として、早くから学界の注目の的とされ、また一九二八年十月の第一次発掘から一九三七年六月の第十五次に至るまでの、中央研究院の殷墟発掘によつて、中国古代史の研究の上に大きくとりあげられるに至つた。然るに一九五〇年以後、各地で行われている基本建設工事の進行につれ、中国各地に殷様式の遺蹟が発見され、殷文化の広汎な分布が明らかになつた。即ち河南省では輝県・鄭州・洛陽・湯陰・新安・陝県・靈宝、安徽省の亳県・太和、山東省の濟南・曲阜・滕県・鄒県、陝西省の岐山、河北省では曲陽で殷式の墓葬、遺址或いは遺物が発見されたといわれる。①此等の遺蹟の詳細は、未だ我々の見ることの出来ないものではあるけれども、そのうちには、小屯より早期のもの、或は晩期のものも含まれ、安陽の所謂殷墟を中心とした今後の殷代史研究に大きな光を与えることとなつて来た。従つて殷代研究に従事するものとして、時々刻々と我々の目にふれる簡報を理解するためには、一度問題点を整理して

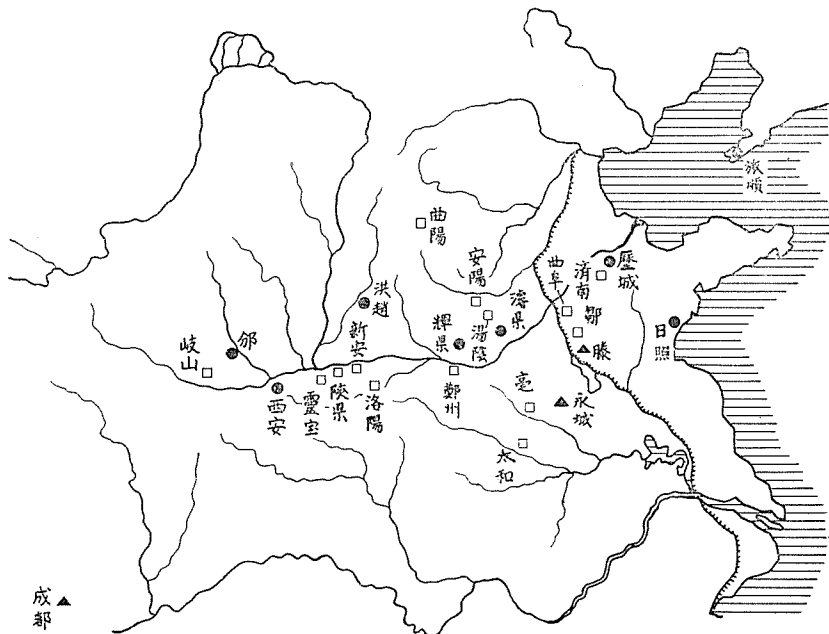
置く必要がある。私が本稿を書くに至つた理由も、この点にあつたのであるが、私は本来甲骨文を中心とした文献研究を主とするものであるために、考古学の素養がまことに乏しい。従つて以下に述べたいとは素人の疑問として、考古学専攻の方々に御教示をたまわりたいとお願ひするのが、実の所の目的である。また本稿では青銅器・陶器・石器の問題をはぶいているけれども、その理由は、これらの研究が非常に複雑で、短時日のうちには整理出来ず、恐らくは、専門の方がこれらについて発表されるであらうと思つたからである。

最初に以上の点をお断りして、以下一甲骨、二建築、三墓葬の三つ点を断片的に列挙して行く。

一

小屯出土の甲骨文の研究については、これのみでも、非常に複雑な問題で、これは他の機会にゆずり、此処では、小屯以外から出土

第 1 図

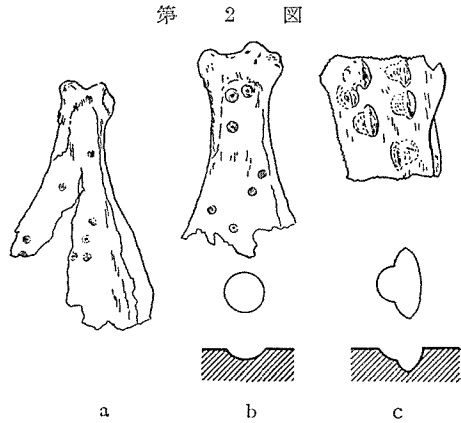


▲ 亀甲出土      ● 骨出土      □ 殷式遺跡

した卜骨ト亀を主として、小屯の前後について考えてみた。小屯以外の戦前の出土は、極く少数であり、山東省城子崖・濰縣大賚店・旅順羊頭窪・濟南大辛莊からト骨、山東省滕縣安上村・河南省永城縣黑孤堆からト亀が出土した。然るに解放後、安陽四盤磨・輝縣琉璃閣、陝西邠縣、山西洪趙縣・長安張家坡村からト骨、鄭州・濟南大辛莊、安陽大司空村からト亀ト骨、洛陽東關泰山廟・成都青羊宮からト亀が出土した。このほか山東日照縣兩城鎮・洛陽濶西孫旗屯からもト骨の出土が報告されている(図1)。

これらの出土地は何れも龍山文化から殷文化の遺址であるが、このうち特に重要なものは、最も多数に出土した鄭州である。鄭州における出土は何れも、殷式遺址からであるが、鄭州の殷式遺址は、小屯の殷代遺址が一つの段階のものであるのに対し、鄭州のそれは早・中・晩の三期に分けられ、晩期が小屯と同じ時期と考えられる。そうして甲骨は三期を通じて発見されたのであるが、詳しく見ると、その出土の情況は三期によつて可成りの差異がある。即ち早期には、亀甲は使用されず、牛・羊・猪の肩胛骨を材料とし、直接火を骨片に当てて卜つた(図2のa)、中期は極く少数の亀甲以外には、牛骨が主要な材料で、羊・猪は

少ない。骨版の裏に凹形の穴（鑽）をつくり、其処に火を当てるものが多く、直接火を当てたものは少い（図2のb）。晩期には亀甲が九割を占め、獸骨が少く、いづれも裏面に凹形の鑽と楕円形の溝（鑿）を作り、鑽に火を当てたという三つの段階が明らかになつた（図2のc）<sup>⑤</sup>。小屯の甲骨は、晩期と同じ方法であり、従つて早中の二期は小屯に先立つものであるということが出来る。そうして洛陽泰山廟出土の亀甲は裏面に方形の鑽と長方形の鑿とを施したもので、陳夢家氏は、最も進んだ方法で、西周初期の殷の余民のものと推定している<sup>⑥</sup>。



鄭州出土甲骨

a 早期 b 中期 c 晩期

（「鄭州市殷商遺址地層關係紹介」による）

この区分によつて、初めにあげた出土甲骨の大体の時期の分類を行つと、濬県大齊店は早期、城子崖・旅順羊頭窪は中期に相当し、何れも龍山系統である<sup>⑦</sup>。輝県琉璃閣は早期（或は中期）で牛猪<sup>⑧</sup>、四盤磨村西北出土のものは中期、西区出土のものは中期で刻辭がある。邵県・洪趙原のものは中期の牛骨、長安の卜骨は中期と晩期との過渡的な牛骨で刻辭がある。洛陽瀾西孫旗屯は早期の猪骨、大司空村、濟南大辛村は共に晩期で牛骨・亀甲何れをも出土している。黒孤堆の亀甲は龍山文化層の更に上の層のものと考えられ、大体中期と推定され、滕県のものも同様であるという<sup>⑨</sup>。成都の亀甲は戦國層の下の層から出土したが、大体中期の様式と考えられる。

以上のうちから時期の確定したのを見てみると、亀甲を卜占に使用する方法は、大体晩期といつてよいようである。従つて一言に甲骨と言うことは不可能ではないであらうか。即ち亀甲は、安陽・大辛莊・鄭州晩期などの如くに、主として鑽と鑿とを裏面にほつて行つた方法と共に分布しているように考えられる。

また小屯の甲骨のみをとりあげても、B区H〇〇一坑は骨版、C区H一二七坑・H二五一の両坑は殆んどが亀版から成り、これに対してH三四四坑は骨版が大多数を占め、埋藏に際しても別個に行われたと考えられる。勿論小屯出土の甲骨についてこのような観点から考ふる時には、その編年と内容との嚴密な検討が必要である。然し

第三期後半康丁・第四期武乙・文丁の時期の卜辭が、内容的にはその前後と可成り區別され、而かも殆んどが骨版のみであるということは、今後の發掘によつて同期の龜甲の出土の可能性はあるとしても、やはり龜甲と獸骨とは異つた性格をもつものであつたのではないかという想像を可能にする。私は一步を進めて、獸骨の文化と龜甲の文化とを分けて考えたいのである。従つて同じ殷代の文化と言つても、小屯或は鄭州晩期の文化には、それ以前の早・中期とは異つた文化の要素が入つて来たのではないかと考えられる。(次号参照)

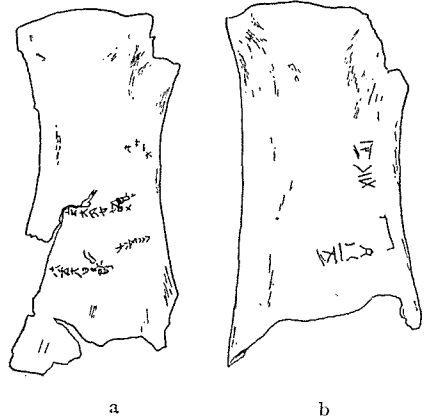
この様に考えて来ると、当然龜版の來源が問題とされる可きであるが、従来では、貝などの來源と共に南方輸入が予想されていた。然るに胡厚宣氏は、小屯出土の龜版の裏面に刻した記辭から考へて、やはり南方と、そのほかに西方から輸入されたものがあることを指摘した。<sup>⑩</sup> 勿論何れにしても、現在のどの地点ということとは不可能であるが、ともかく西の方からも輸入されていたことは興味ある。成都から出土した龜版が時代の先後は別としても、戦国以前に四川地方で、龜甲を卜占に使用する風習があつたことを示している点で、やはり古くから陝西・四川を通じてこの地方と交通が行われていたことを想像させる。而かも、成都出土の卜龜は、裏面に鑽を作り、その周囲に細条紋を施しているが、小屯出土の第一期王族卜辭といわれる龜甲には、表面ではあるが、やはり細条紋がほられて

いる。卜龜に対して何か同じような觀念があつたのかもしれない。

また東南の黒孤堆の卜龜について考えると、その附近の造律台の龍山文化の遺址からは、麻龜と言われる龜の殘骸が出土した。<sup>⑪</sup> これは食用にしたものと考えられるが、これが、小屯・大司空村・後岡の殷の遺蹟からも出土している。<sup>⑫</sup> 麻龜というのは、甲の裏面に蜂窩状に小孔の密集したものであると言われる。このような点も、今後の甲骨の研究に参考になると思われる。

最後に文字についてふれると、戦前には小屯以外では後岡出土の卜骨上の刻辭があり、これは董作賓氏によつて解読され、小屯出土のものとは大略同じものとされた。<sup>⑬</sup> 解放後になつて、初めにあげた出土甲骨のうち、四盤磨の一片・鄭州晩期・大司空村・長安張家坡村のものは何れも文字をとまなつていた。これらは、中國の學者によつて習字刻辭と呼ばれているが、未見の大司空村のものは除き、鄭州のものは小屯と殆んど同じと考えられる。然るに四盤磨と長安のものとは、何れも骨版を横にして書いたと思われる点があり、而かもその文字の線のつかいかたが類似している(図3)。この点は小屯のものとは可成り相違し、而かも小屯のものはすべて縦に甲骨骨を用いている。従つて時代の上からは、或は小屯に先行して、それに続くものであるかもしれないが習字刻辭として一括するよりは、寧ろ四盤磨と長安のものは別段階と考えたほうが、よいように思われ

第 3 図



a. 四盤磨出土,  
b. 長安張家坡出土

る。これに類似した線の使用は城子崖出土の陶文があげられるのであるが、この文字の点からも、亀骨と獸骨とは別の系統のものと考えることが可能なのではないか。この点他の土器・石器などの研究から如何に考えられるのであろうか。

二

次に建築、主として居住址について見たい。この点に関しては、二つの観点から考えられる。一つは解放前に発掘された小屯地域の遺址についての研究、第二は鄴州などの新しく発掘された遺址につ

いてである。

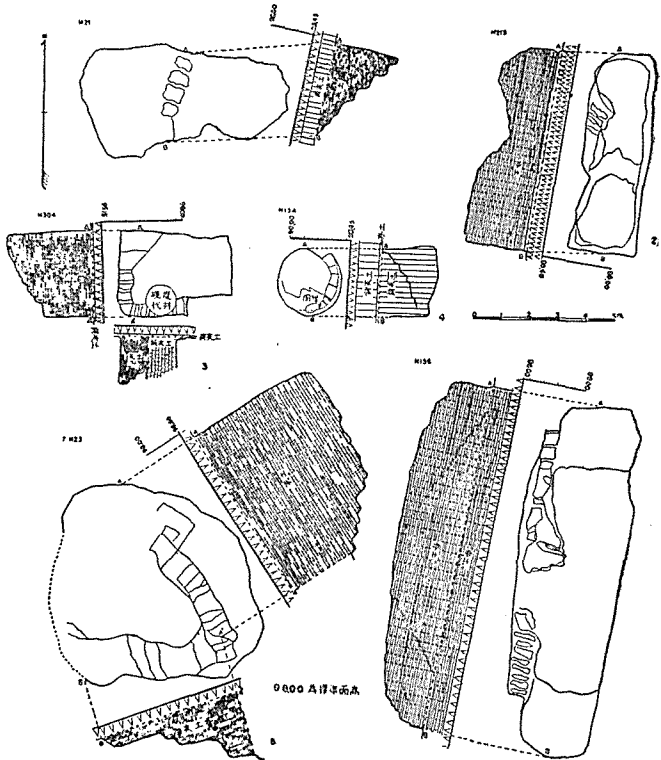
第一に關しては、石璋如氏が最近に發表した「小屯殷代的建築遺蹟」なる一文が非常に参考になる。石氏は小屯の遺蹟を地下と地上との二種の建築に大別し、前者は更に穴・窖・竇・墓・坑・坎・溝に分けられる。後者は一般に版築基址といわれるもので、土をつぎ固めて地上建築物の土台とし、その上に礎石をならべて建築を行つたりしたものである。勿論地上の建造物は残つていないので、この版築基址から地上建築の所在を推定する。従つて時によつては基址の大きさと建造物の大きさは簡単に一致させることの出来ない場合がある。また地下建築と地上建築との間にも、同時に使用されたものもあり、時代的に先後をつけることも簡単ではないらしい。最も大きな難点は、此等のものが、小屯発掘区域内にどのよう分布していたかも実は明らかでない。また五期に時代区分された甲骨文によつて大凡の時代推定をして行くのも困難なのである。従つて以下では石氏の論文を中心として、部分的な建築の紹介をするが、最初に地下居住址の大略を述べよう。

上にあげた七種の地下建築物のうち、溝は水溝、坎は性格が不明、墓・坑は墓葬に分類されるもので、居住に使用されたものは、穴・窖・竇の三種である。このうち日常の居住場所として使用せら

れたものは穴で、上口の大きさに比して底が浅く、階段によつて上下したものである(図4)。穴底に大形の石塊を置き、また上口の周囲にも石塊を並べたものがあり、この石塊は柱礎である。即ち底部のは中心の柱の礎石であり、これに穴口の周囲から柱をわたして屋根をふいたものである(第八図H二九三)。まだこれらの居住址の復原は発表されていないようである。或は穴には単なる居住場所以外に使用されたものもあるらしく、H二一坑からは銅范の破片が多数に発見されているから、銅器の鑄造場所として使用されていたものかもしれない(図4の1)。このような場所があつたことは、後に述べる如く、第五次発掘の時にすでに知られていたのである。

この穴からは、遺物は殆んど出土しなかつたのに対して、次の窖・竈は一般に上口に比して深く、階段がなく、両壁に手足をつつばつて上下するものと、足がかりの小さいクボミを口から底に向つて幾つか製つたものがある。これらはE一八一、H五三三、H二五一、E一六、H一二七などの如く、多数の甲骨、陶器などを出土し、地下の倉庫として使用したもの

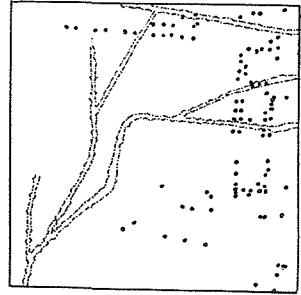
第 4 図  
小屯地下住居址 (「小屯殷代の建築遺蹟」)



と考えられる。この二つに屋根があつたか否かは不明であるという。次の水溝は、第十三次発掘以後に新たに発見され、従つて小屯発掘区のB・C区にのみ見られた現象といふことが出来る。これには三種の種類があり、一は竈溝といわれ、上口の幅二・五米前後・深さ

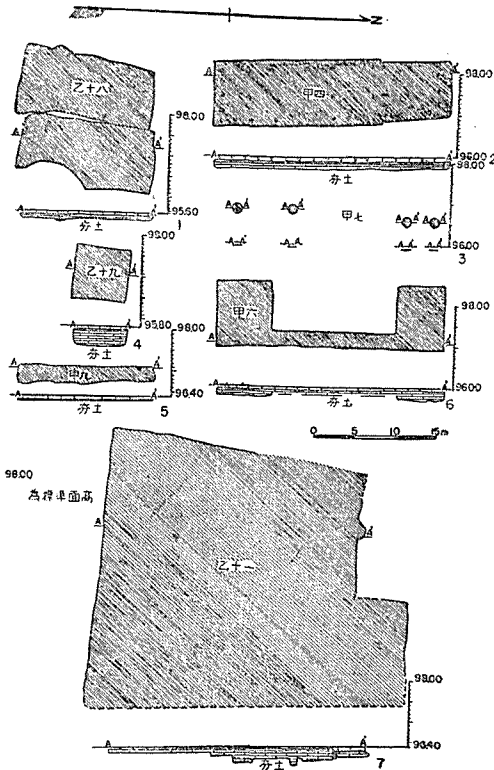
二・二一五・六米で、不規則な形をしたものである。二は兩壁に等間隔で杭のあとの残るもので上口幅〇・四一〇・七米、深さ一・二六米あり、幹溝とも呼ばれる。これに對して第三の枝溝は幅〇・二五一〇・五米、深さ〇・八米である。幹溝・枝溝は底に薄く砂がたまり、その上には夯土が填まつていた。従つて開鑿して、後にまた土をうめてつき固めたものである。石氏によると長期にわたつて水の流れた痕跡はなく、ぢぎに埋められたようである。その用途は水道とは考え難く、地上の建築を行うに先立つて、地面の傾斜を測量するために作られたかと推定したのであるが、図5の如き礎石と水溝との関係図によつて考える

第 5 図



水溝と礎石 (「殷墟最近之重要発現」による)

第 6 図



小屯建築基址 (「小屯殷代的建築遺蹟」)

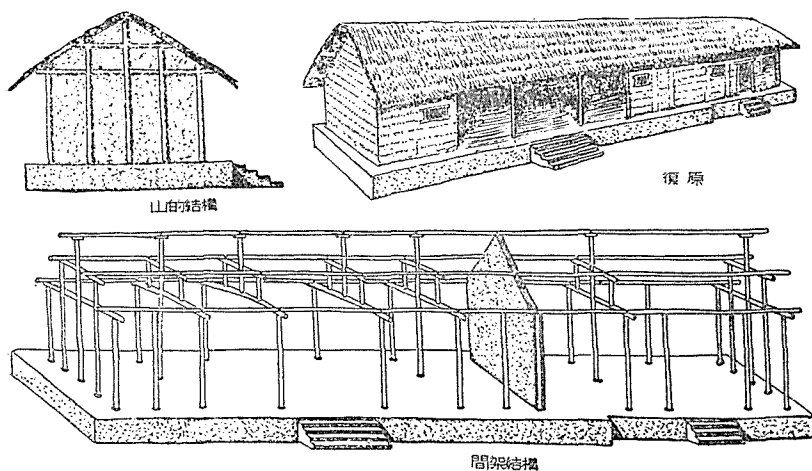
と、水平測量とも考え難い。但しこの水溝は基址の下層で而かも基址の下面に接したものが多くので、基址の建設と関連して行われたものであらうと考えられる。更に注意すべきことは、B・C区にのみこれが見られたことであるが、これは更に後にのべよう。

次に地上建築について述べよう。はじめにお断りした如く、建築物そのものはなく、基址と礎石とが残っているのみである。小屯では五十三の基址が見出され、これは三組に分けられ、甲組十五所は

D・E区に、乙組二十一所はB・C区、丙組十七所はC区の一部に分布している。周辺では後岡・四盤磨・大司空村などにも分布している。<sup>⑤</sup>石氏はこれらの基址を形とか作り方とか数種に分類しているが、ここでは省略する(図6)。また礎石はすべての基址に作られたものではなく、或は全くないものもあるが、門の部分、或は通路と考えられる所などが比較的明瞭に残っている。また通路には小石を敷きつめて踏みかためたと思われる石子路と呼ばれるものがあり、四盤磨地区からも発見された。これらの基址上の建築の復原は第七次E区発掘で得られた甲四基址のみで(図6の2・図7)、石氏は周礼の夏后氏世室の文によつて試み、且つこの復原によつて周礼の文を訂正している。<sup>⑥</sup>壁は版築牆、屋根には茅草を用い、夏后氏の制度に類似する所から、殷代早期の建築と考えた。このような年代推定に疑問があることは勿論であらう。

さてこれらの地下・地上の居住址は、一つの穴、一つの窖、或は一つの地上建築が全く独立して使用されていたとは考えられない。穴と窖・竈とは形から見ても明らかに用途がことなるので、当然それらの間には一つのグループが作られて使用されていた筈である。また地上建築はその表面に殆んど遺物をとどめていなかつたようなので、これまた別の地上建築か或は窖など一つの組として使用さ

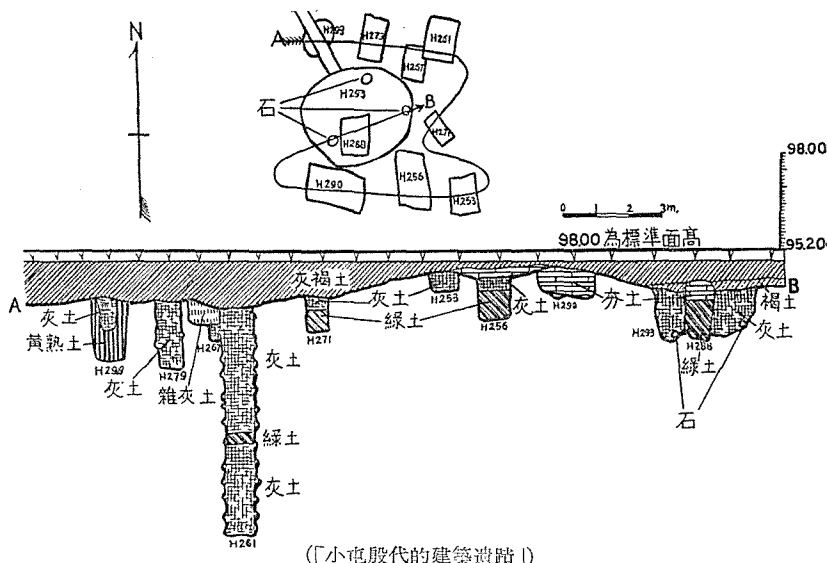
第 7 図



甲四基址の復原 (「殷代地上建築復原之一例」)



第 8 図

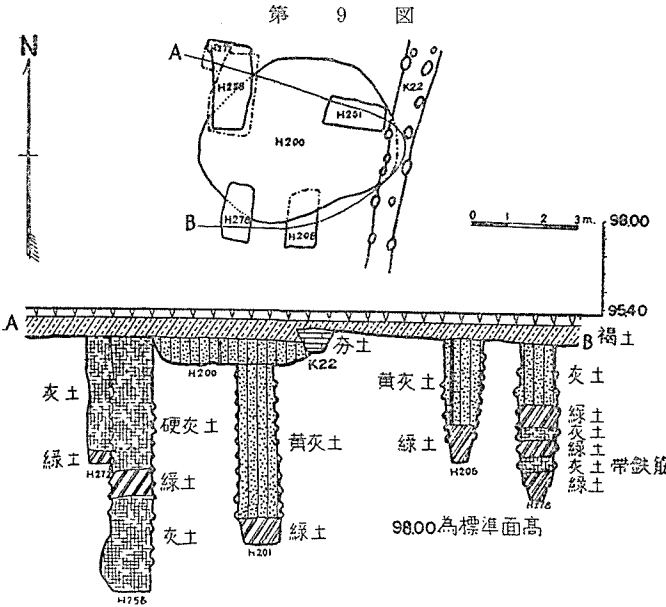


れた管である。石氏は、地下建築の構成の形式を居住場所である穴を中心として、1 囲繞円穴式、2 囲繞楕円穴式、3 半円円穴式、4 半入円穴式、5 円穴為首式、6 雑乱排列式に分類している。今このうちの 1 と 4 とを紹介する。

1 は H 二九三大穴を中心にして、その周囲に H 二九九、H 二六七など八個の長方坑がある(図 8)。H 二九三の内部にある H 二八八は地層関係から後期のものと考えられ、また H 二九三そのものからは黒陶系の遺物が出土している。石氏はこの H 二九三は一度早く埋められ、上部の褐土の部分が殷代にも居住址として使用されたのではないかと推定し、この穴坑の西部には窖がないので、H 二九三の出入口は西面にあつたのではないかと考えた。従つてこの居住者は西を出入口とし、周囲の八坑を貯蔵所として使用したのである。そのうち H 二五三と H 二七九からは甲骨を出土し、その時期は恐らくは第一期武丁時代に近いものと推定される。小屯地域の殷代遺址は武丁の伯父般庚から始まると考えられるので、若しこの推定が当たっていると面白いが、断面図からも見られる如く、これらの穴窖の上口が同一水平面にはないので、石氏の推定が可能であるのか否か、問題である。また H 二九三が埋められた後の状態で果して居住址としての穴の機能を果すことが出来たか否かも疑問であるし、これから出土した黒陶系統の遺物と、小屯期の遺物との関係もどの

ように考えられるのであろうか。

次に4の半入田穴式は、穴H二〇〇を中心に五個の長方坑から成り、H二〇一は穴の内部に更に作られたものであり、他は半ばが穴にかかつている。(図9)。このH二〇〇は水溝K二二によつて一



(「小屯殷代的建築遺蹟」)

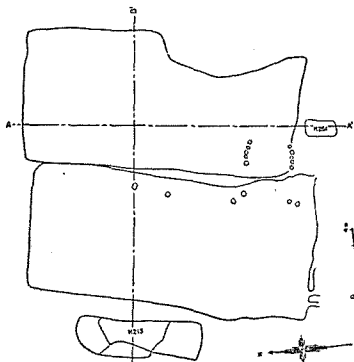
部を破壊されている。石氏によれば、水溝が作られたのは、殷代中期といわれ、従つてこの一つのグループは中期以前のものと推定される。而かもH二五八から出土した一片の字骨は、断片で余り明かではないが第一期卜辭に属するものと考えられ、水溝の年代とも矛盾しない。従つて先づこの組合せは肯定せられるのではないか。ただこの際、各坑に填まつた土の色などによつて夫々の坑の使用が知られる方法があれば尚一層興味あるものとなる。

さて次に地上建築についてふれる。上に述べた如く、これもまた一つのグループをなして成立してしたのであるが、すでに第五次B区發掘によつて注意されていた。即ち郭宝鈞氏によると、乙一基址即ち有名な黄土堂基といわれる基址は、一辺十六米ほぼ正方形のもので、北辺東辺は牆壁があり、この基址を中心にして北に多量の甲骨を出土した大連坑、西は版築土が広がり、西北に石玉の加工場、西南に骨器・銅器の製造所があつたという。この基址は乙組基址の最重要所であると考えられている。郭氏はこれを当時の明堂路廟のあとと考え、また南には広大な壇となつて拡がり、その南に三座の門があつたという<sup>②</sup>。大連坑出土の甲骨は、第三期後半・第四期を除き第一期から第五期にわたつており、この堂基を中心とする遺址は小屯時代を通じて使用されたと考えられる。然しこの基址の詳細は報告が出ていないので、全容を知ることが出来ない。

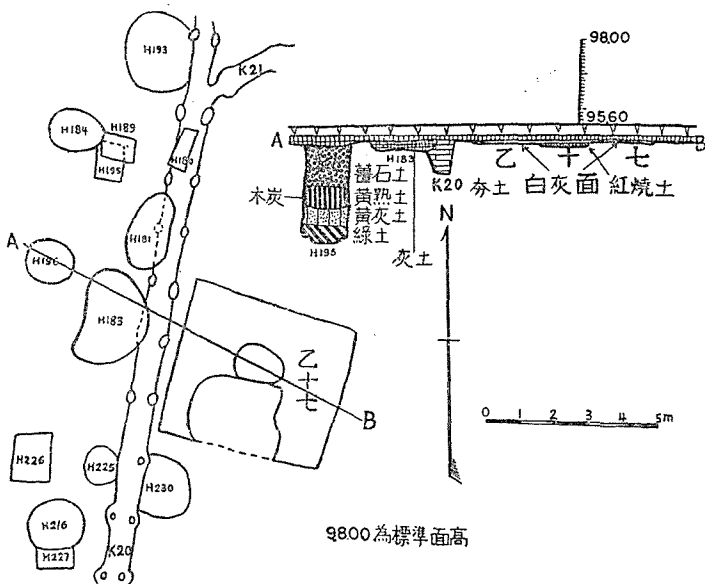
期のものであり、文字も特殊であるので、その頃の別の貞人の集団に關係ある居住者によつて占められていた住居ということになる。この基址は第十五次發掘に

地上建築の場合には恐らくグループをつくることは地下のものの相互の場合よりも更に困難であると考えられる。従つて石氏も二つの例をあげているに過ぎない。その一つは乙十八基址とH二五一審である（図10）。この基址は東西に連続した二基址からなり、東部の西南に門と思われる礎石の列があり、これは西部に続いている。H二五一はその門外、基址の南にあり、そのなかからは亀甲約七百片を出土した。そのうちの一片には「喪于門」という卜辭があり、この門はこの基址の門に当ると考え、従つて乙十八の居住者の使用した亀甲がH二五一に入れられたと考えたのである。この推定が正しいとすれば、この出土亀甲は第一期王朝卜辭とは異なるが、先づ第一期或はそれに近い時期のものであり、

第 10 圖



〔小屯殷代的建築遺蹟〕



第 11 圖

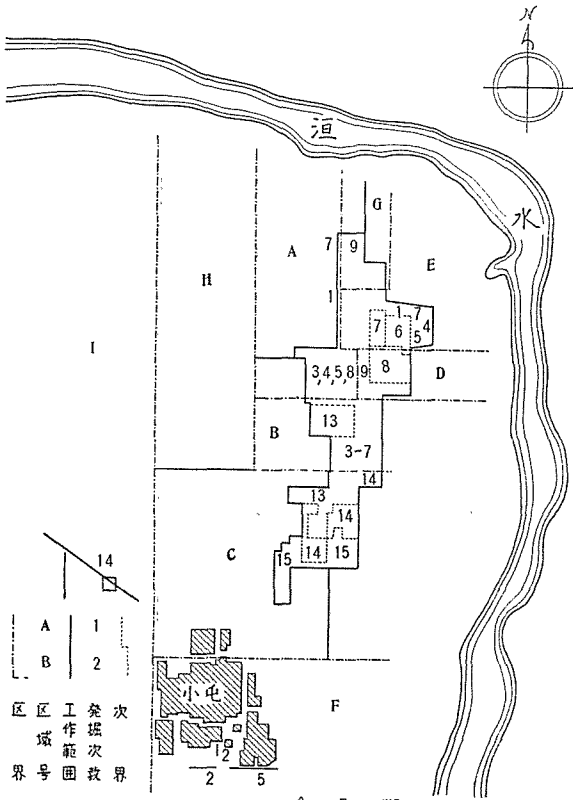
〔小屯殷代的建築遺蹟〕

よつて得られたものである。今一つは乙十七基址とH一九六審との關係である（図11）。この二つの距離は三・八米、その間にはH一八三穴とK二〇水溝とがあ

り、前者は晩期、後者は多少早いといわれる。このような時期の早晩は別として、乙十七とH一九六とを結びつけた石氏の論点は用途上から見られたものと考えられる。乙十七は小屯の遺址中唯一の白灰面をもつた基址であり、その中央に南北径一・一米、東西径一・三米の円形に近い紅焼土がある。一方H一九六の内部は、上層に黄土と薑土とがあり、中層は黒土で木炭と考えられる。下層緑土のなから大小十三個の陶豆と破砕した壺四及び石器が出土した。石氏はこの紅焼土と木炭、陶器と白灰面とを関連させて考えようとしているが、結論は出していない。

以上石氏の論文によつて小屯地区の遺蹟の例をあげて来たが、ここで考えなければならぬことは、一体これらの居住址がどのように分布していたかということである。これについては、考古学報などにせられた一部を除き、殆んど不明である。従つて小屯の遺蹟が、どのような生活体を基礎として成立つていたかは今の所考古学的な資料から推定することは不可能である。ただ地上建築については面白いことが発表

第 12 図



(小屯発掘区域図)

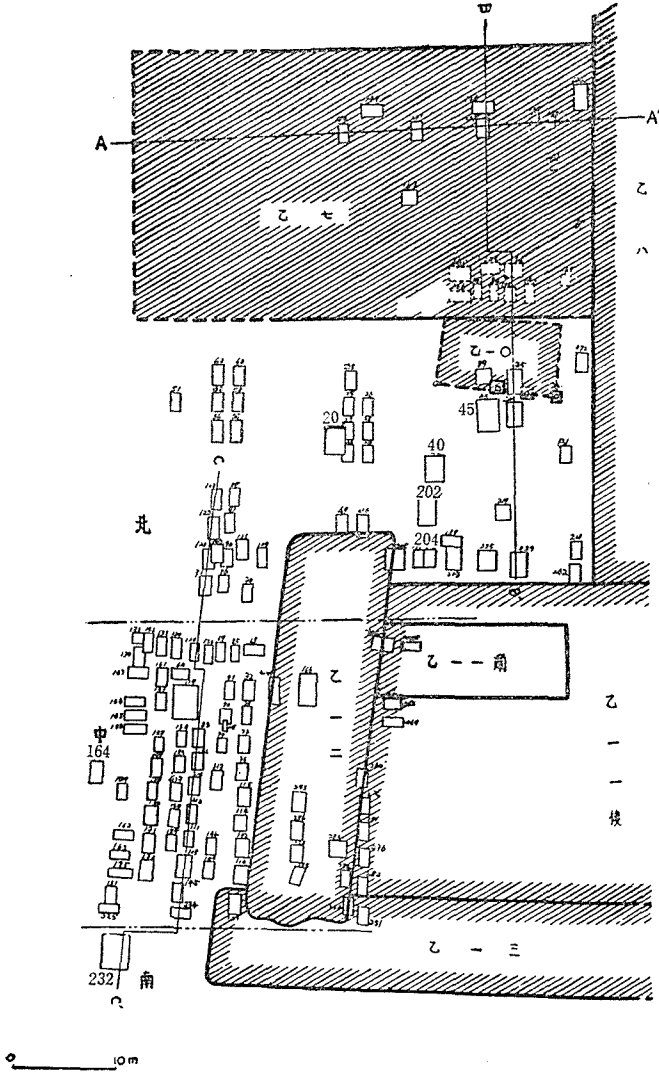
されている。それは甲・乙・丙三組に分けられたうち、甲組と乙二組とは大きな相違があることが明らかにされた。即ち墓葬の所でべる如く、乙・丙二組の基址は、一つの基址の内部或は周囲に多数の墓葬を併なつてゐるのに対し(図13)、甲組の基址にはこのような現象が見られない。従つて甲組と乙・丙組の間には、換言すればD・E区とB・C区との建築物には(図12)、時代上の差か、

或は居住者団体の性格、或は用途の上の差、何か差異があり、更に前の水溝について見ても、B・C区に水溝があるに對して、D・E区にはこれが見られなかつたのである。董作賓氏は、墓葬の有無を観点とし、此等の墓葬は、西北岡の大墓と同様の性格のものであるとし、乙・丙兩組は宗廟、甲組は宮殿の遺址と考へた。即ち「生王住的は宮室、死王住的は陵墓。殷人信鬼、把生王一切的享用侍衛、都搬到陵墓去、這是西北岡殉葬的儀式。把死王神靈求格求饗的宗廟、也同様預備一套、這是小屯村建造宗廟時祭奠的儀式」というのである。②。そうしてこの宗廟地域の中心は黄土堂基であるという。若しこの推定が正しいとすると、前にのべた黄土堂基の周圍にあつた各種の場所は、祭祀のためのものを作る場所とも考えられるようになる。然しこのような考えが果して正しいであろうか。

一体小屯地区の遺蹟は武丁から帝辛（紂王）までの卜辭を出土している。この卜辭が五期に区分されるものであることは周知のことである。然るにその出土地点は、第十三次・第十五次發掘にC区からは第一期或はそれに近い卜辭を出土し、F区からは第四期卜辭のみを出土した以外には、他の区域と卜辭との關係は明らかでない。それは第九次發掘までに得られた甲骨の出土坑位の記録が、一部を除いては發表されていないからである。

今このC区出土の甲骨をとり出して考へて見よう。先にあげた乙

十八基址は第十五次發掘によつて得られたものであるが、これと關連して考へられた卜辭は、第一期に近いものではあるが、特殊な真人集團のものであつた。その他第十五次のC区から得られた卜辭は大体この真人集團と同じものであり、従つて小屯村北發掘域の南部は、この特殊な真人集團によつて第一期に占居されてゐたわけである。然らば第一期以後は如何ということになるが、この真人集團の屬した人達によつて引き続き占居されてゐた可能性もあるが、それ以後の卜辭が發見されていないことから考えると、第一期以後には、使用されなかつた可能性が強くなる。更に考へられることは先の黄土堂基の北にあつた大連坑及び附近出土の甲骨は第一・二期が少数で第三期卜辭が最も多かつたといわれ、またB区以北の發掘では第一・二・三・五期卜辭を出土したけれども、C区から出土したのと同じ真人集團の卜辭は殆んど發見されなかつた(図12)。従つてこの乙十八基附近は先づこの真人集團によつて第一期武丁時代或はそれに近い時期に占居され、東西四十余、南北十余米で、南北に三個の大門をもつた大基址を中心にして生活が行われたと考へられる(この大基址は、胡厚宣「殷墟發掘」にのせられてゐるが詳細は全く不明である)。若しこのような推定が可能になるならば、先の董氏の言葉は全部をそのまま肯定することは不可能になるのではないかと思われる。例え宗廟があつたとしても、純粹の王室の宗廟ではない



乙七基址と墓葬群  
 (「小屯c区の墓葬群」)

のである。<sup>⑩</sup>

また石氏が乙、丙兩組には墓葬が併うというけれども、郭宝鈞氏の報告によると黄土堂墓の周囲には余り墓葬が見られないから、これも実は宗廟(董氏の観点に立つては)ということとは不可能なので

ある。

従つて現在までに發表された報告のみから董氏の如く考えることは危険といわなければならぬ。今後さらに詳細な報告を期待すると共に鄭州の發掘においては、殷式遺蹟の全体を把握するような發

掘・報告が行われることを望みたい。

最後に更に一二遺蹟について気付いた点にふれておく。

鄭州の発掘において、殷代の鍊銅遺址、製骨遺址などが発見されたことである<sup>④</sup>。これらの詳細は何れも現在未見であるが、これらはやはり、小屯でも一例えば黃土堂墓の周辺に発見されたものである。然しこれらとは異なり、小屯の殷代遺蹟で発見されなかつた製陶の窖が、鄭州では可成り多数発見された。これらの窖址は、鄭州銘功路の西側一三〇〇平方メートルの範圍から十五座が、十四座の基址、灰坑六十七、墓葬十九と共に発見された。これらの窖は円形と桃形とあり、時期は中期のものである。更にこれらの窖の附近からは陶甕、陶印模、或は赤焼成の土坯、焼成に失敗した陶片などが多数あり、而かも基址なども併せて、可成り密度の大きい製陶地域をなしていたことがわかる。この地区の基址の例をあげると、地上に版築を作りその上に白灰面を塗り、四方には牆壁を設け壁の一方に門がある。門に對した壁下に焼土台が残っている。このような形式の房基は二個あり、その一は長七・四米、寬三・七米あり、基址の下に東西に並んだ六個の墓葬があり、うち三墓は小兒であつた。こゝういつた基址と埋葬との關係は、同じく鄭州市北部の任砦から出た基址にも見られ、東西九・三米、南北三・八米、四方に牆壁があり、その厚さ約〇・六米。先に東西の牆を作り、次に南北を築き、

最後に東西の部屋を分つものを作る。房内は夯土が四層あり、各層毎に白灰面と火焼土があり、白灰面は牆壁面にもほどこされてい

る。東房の北壁に門があり、南壁の門に對した場所に小さな焼土台が作られていた。この基址の夯土或は牆壁の下に小兒或は犬の骨が発見され、小屯の乙・丙兩組と同様であつたといふ<sup>⑤</sup>。従つて先の製陶区の基址に見られた墓葬も同じような意義と解される。若しこのように考えられるとすると、単に宗廟に對してのみ、これらの墓葬が行われたのではなく、普通の居住地域にもこのようなことが行われたと考えられるのではないか。この問題は別として、免も角、五次にわたる小屯発掘で殷代期の窖址が発見されなかつたことから考えると、この小屯地域は更に製陶などを行う場所を他にもち、これをも含めて一つの生活区域をなしていたと考えられるのである。

今一つは、ここに述べた建築基址に行われていた白灰面についてである。小屯では先にあげた乙七七基址がただ一例であつたが、実はこれは割に広く分布する現象なのである。安陽後岡・濬県大賚店は何れも黒陶期の堅穴居住址に行われており、陝西關雞台からは地上建築に白灰面が設けられているのが報告されていたが、最近になつて鄭州では先の二例のほか、北郊の紫荆山からは東西四米、南北二・五米、四周に残高〇・五米の牆がある基址があり、これに白灰面と焼土があつた。また人民公園の北からは長四米、寬二・九米

の二層に堆積した居住址があり、北・西とは岡をけずつて直接牆とし、南には牆を築き、この二層の居住址によつて連続して使用されたが、二層ともに厚さ三―五耗の白灰面があつた。これらは何れも殷式遺蹟である。

このほか、鄭州二里岡の黒陶期の袋穴式灰坑、洛陽澗西孫旗屯の仰韶期の坑の底面には白灰面、或は白灰台と焼土があり、長安半坡村の仰韶期居住址にも底面と牆壁とに白灰面が発見された。

この白灰面とは石灰質のもので、黄土中に多量に含まれる生薑石を粉碎して、その粉末を水によつてねり、これをぬると乾燥後非常に堅硬になるといわれる。且つ石灰質であるため、湿氣を防ぐことも出来、また美しくもある。即ち漆喰である。この効用のために使用されたのであるが、これが小屯で使用されなかつたのは何故であるか(白灰面の一部に見られる焼土は火を燃やしたあとである)。

白灰面の厚さは、最厚で一纏と言われ、一つの遺址で通例數層発見されるから、ある期間使用されると、その上にまた土をいれて更に白灰面が作られる。また小屯地区の發掘の中途で行われた後岡、大賚店の發掘などで、白灰面が発見されているので、小屯でも氣付かれなかつた筈はない。またこの白灰面をつくる技術も知られていたのである。即ち乙十七基址には一例ながらこれが有り、この基址と関連ありとされるH一九六坑の上層には黄土と多量の薑石とが発

見されているからである(従つて石氏が乙十七の白灰面とH一九六坑内の陶豆を關聯させたのは誤りである)。私は最初に小屯では白灰面をつくる代りに夯土、即ち土をつき固めることによつてこれに代る効用をさせたと考えたのであるが、鄭州では夯土基址の上に更に白灰面を塗つているし、小屯の穴坑にもこれが使用されていないので、この考えのみでは通じないように思われる。技術的には夯土のほうが容易な方法と思はれるが、何れにしろ、これは将来小屯の遺蹟の性格を考える際に何か参考になるかもしれない。

以上で遺蹟の項を終るが、何はともあれ、遺蹟全体の關係を知り得る如き報告を期待して止まない。(以下次号)

註

① 胡厚宣「殷墟發掘」頁一三七以下。この書は、解放前の十五回にわたる殷墟發掘についても、年次を追つて記録してあり、便利な書である。

② 郭宝鈞「一九五〇年春殷墟發掘報告」(中国考古學報第五冊)、安志敏「一九五二年秋季鄭州二里岡發掘記」(同第八冊)、馬得志等「一九五三年安陽大司空村發掘報告」(同第九冊)、郭宝鈞等「一九五二年秋季洛陽東郊發掘報告」(同) 以外は報告は未刊。

③ 陳夢家「解放後甲骨的新資料和整理研究」(文物參攷資料、一九五四年第五期、以下文參と簡稱する)

④ 山西省文物管理委員會「山西洪趙渠堆村古遺址墓羣清理簡



報」(文参五五年第四期)、陝西省文管会「長安張家坡村西周遺址的重要發現」(文参五六年第三期)

⑤ 陳夢家、前掲書

⑥ 郭宝鈞等「一九五二年秋季洛陽東郊發掘報告」四川省文管会「成都青羊宮古遺址清理簡報」(考古通訊一九五六年第二期、以下通訊と簡稱)

⑦ 尹煥章「華東新石器時代遺址」頁一〇、河南文物工作隊第二隊孫旗屯清理小組「洛陽瀾西孫屯古遺址」(文参五五年第九期)

⑧ 陳夢家、前掲書。鄭州市文物工作組「鄭州市殷商遺址地層關係介紹」(文参五四年第十二期)。安志敏前掲書は鄭州を四期に分け、鄭州一期は輝県一期(琉璃閣北・中区)に当り、鄭州三・四期は小屯と輝県二期(南区)に当るといふ。

⑨ 陳夢家、前掲書。郭宝鈞等、前掲書

⑩ 劉燿「河南濬縣大賚店史前遺址」(田野考古報告第一期)、李濟編「城子崖」、東亞考古学会「羊頭窪」

⑪ 陳夢家、前掲書

⑫ 李景昶「豫東商邱永城調査及造律台黑孤堆曹橋三処小発掘」(中国考古学報第二册)

⑬ 本稿頁五七参照。この期の卜骨の出土はD区のみ。

⑭ 胡厚宣「殷代卜龜之来源」(甲骨学商史論叢初集第四册)。

胡氏は所謂甲橋刻辞を中心とし、広く地誌から龜の産地をたどつて、殷代の卜龜は南方・西方の楊子江流域からもつてこられたとする。勿論甲橋刻辞からたどられるものは南方からのものが多いが、西方経由のものは、四川に通じていたと考えられる。

且つ胡氏は、黒陶期には獸骨を使用し、殷代になつて南方との交通が盛んになつて、龜甲を使用し、龜靈の觀念が発生したといふ。ここで考えられることは、鄭州の殷式遺蹟の早期が獸骨のみを使用しており、更に次号にふれる如く、鄭州における青銅器の出土が中期から始まる。即ち龜甲と青銅器とが同一時期からはじまり、殷式早期では、青銅器は未発見である。従つて、

従来殷式文化と黒陶文化とは、余り関聯が認められなかつたのであるが、鄭州の發掘が進めば、殷式早期を岐点としてこの二つの文化の間の關係が明らかになるかもしれない。また今まで考古学的には殷の文化と西方との關係も余り考慮されなかつたが、今後はこれも重要になるであろう。

⑮ 図参照。黄河に沿つて殷式遺跡は陝西まで伸びていることを考えたい。

⑯ 尹煥章、前掲書頁七二

⑰ 馬得志等、前掲書及附注④

⑱ 董作賓「釈後岡出土的一片卜辞」(安陽發掘報告第四期)

⑲ 中央研究院歷史語言研究所集刊第二十六本所収。この項は註記なき限り、大体この論文による。

⑳ 石璋如「殷墟最近之重要發現」(中国考古学報第二册)、図はこの論文にのせられた安陽小屯C区現象図による。

㉑ 註②及梁思永「後岡發掘小記」(安陽發掘報告第四期)

㉒ 石璋如「殷代地上建築復原之一例」(中央研究院院刊一)

㉓ この種の卜辞は、陳夢家氏によつて第一期後半組卜辞とされたものに近い。第十五次發掘出土。

②4 郭宝鈞「B区発掘記之一」「同二」(安陽発掘報告第四期)。

②5 董作賓「甲骨学五十年」頁五四。

②6 卜辞にあらわれる門は、色々な種類があり、未だ正確な見解はない。従つてこのように簡単に結びつくかは疑問であるが、参考にすべき事例である。

②7 註②3

②8 石璋如「第七次殷墟発掘—E区工作報告」(安陽発掘報告第四期) 図版一参照。

②9 註②5

③0 董作賓「甲骨文断代研究例」(慶祝蔡元培先生六十五歲論文集、上冊)

③1 このグループの卜辞にあらわれる祭祀対象は第一期王朝卜辞のものとは多少異なる。

③2 河南省文物工作队第一隊「鄭州市古遗址、墓葬的重要發現」(通訊五五年第三期)

③3 河南文物工作队第一隊「鄭州發現的商代製陶遺跡」(文參五五年第九期)、「鄭州市銘功路西側發現商代製陶工場、房基等遺址」(文參五六年第一期頁六四)

③4 河南文物工作队第一隊「八ヶ月来的鄭州文物工作概況」(文參五五年第九期)

③5 梁思永「後岡發掘小記」、劉燿「河南濬縣大賚店史前遗址」(田野考古報告第一冊)。新石器、特に黑陶期には普通である。

③6 張建中「鄭州市北郊紫荆山一带發現商代遺跡」(文參五四年第十一期)、河南文物工作队第一隊「鄭州發現的商代製陶遺跡」、

後者もやはり製陶窑址に近接したものである。

③7 前掲「八ヶ月来的鄭州文物工作概況」、「洛陽瀾西孫旗屯古遗址」、考古研究所西安半坡工作队「西安半坡遗址第二次發掘的主要收穫」(通訊五六年第二期)

③8 胡繼高「白灰面究竟是用什麼做成的」(文參五五年第七期)

新入会員(一)

- 有泉 貞夫
- 安藤 証憲
- 石田 真一
- 石躍 胤央
- 稲垣 泰彦
- 岩根雄治郎
- 内海 佑治
- 大山 喬平
- 小川 徹
- 小田富士雄
- 門脇 俊彦
- 金 載元
- 工藤 敬一
- 桑原 公德
- 小林 公徳
- 小林 鳳門
- 芝原 拓自
- 下村 弘巖
- 田代 守人
- 田中 彰
- 坪田 嘉子